1992年11月1日発行　（財）高知市文化振興事業団

文化高知 50

課題

町田　貴

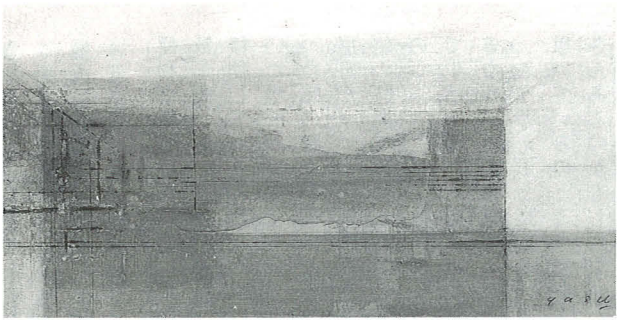
これからの卸売業のマネージメントについて、大いに研修をしようじゃないかという目的で、遠く離れた海外の島で二週間を過ごした。

その島の法眼総領事から「今、日本とアメリカ、これからの日本の立場、方向性」というテーマで、講話を聞く機会がもてた。その彼のアメリカ評は、アメリカ人の善悪の判断の基準は非常に日本人に似ているし、アメリカ人ほど礼節を尊ぶ人種はいないとのこと。本来Gentlemanと君子は同じ意味、このことを理解していないと誤解を生じるもとである。

だから日本人とアメリカ人が仲良く出来ているのは単に商売上の関係でなくて、もともと似たもの同士なのだ。

また、「これからの日本の立場」についての話は興味深いものだった。今まで国家のパワーの指標は、Power＝Economy（経済力）＋Military（軍事力）＋Human（労働力）＋Ideology（イデオロギー）、それがソ連の崩壊により軍事力は限りなく0に、またイデオロギーも0になった。従ってこれからはPower＝Economy（経済力）＋Human（労働力）＋m（小さな軍事）、これはまさに日本の時代。

特にHuman（労働力）は、H^1（労働力）とH^2（世界とコミュニケートする力）に分けられる。日本にとっての課題は、H^2（世界とコミュニケートし、評価を得る力）を高めなくてはならない。しかしH^2の向上において、日本人は大いなる弱点を持つ。H^2を向上させるには、言葉の障害を取り除くこと、日本が豊かになる事が先決、衣食足りて礼節を知るのではなく、衣食住足りて礼節を知る、である。日本人が幸せなのは、言葉の上でも民族の上でも、マイノリティなのに自分たちではメジャーだと思っている。高いところに目標を掲げるのは良いが、自分のポジショニングを見極めなくてはならないという講話で、非常に感銘を受けた。



「風　景」　　岩合泰治

さて、九月六日に成田を出発した海外研修も十九日大阪到着で終了。機内預け荷物受け取り、入国手続き、税関検査の手続きをし、やっと日本に帰れ安堵した。あいかわらず、ロビーは大勢の人でごったがえしている。空港に備えつけのカートへ荷物を運ぶ。カートを私の身体にあて、行列の中に割り込み、他人におかまいなく先に出ようとする人がいる。何故、そんなに急ぐのか。

そんな光景を見た時、国際人としては、まだまだ幼稚でお粗末だし、日本にとっての課題H^2を高めることは仲々むつかしいのではないかと考えさせられた。

（高知卸商センター協同組合理事長）

土佐人

西村かおる

「ご出身はどちらですか？」「高知です」「えっ、土佐の高知ですか」「はい、そうですが？」この至極当たり前の質問、なぜか、私が「高知」と答えた瞬間、驚いたように口ごもる人が多い。けげんそうな顔の私を前に質問者は「あっ、いえいえ。はあ。お酒がすごいんでしょうねえ」とか「ああ、いごっそうですね」という反応が返ってくる。ふーん、この人今までにどんな土佐人に出会ったのかな、と問うてみると、皆さんお酒が強くて、面白いけど変なと称される土佐出身の知人をお持ちなのだ。でも高校までの私を取り巻く人間を振り返ってみても、そんなに特別変とおぼしき人間は見当たらないように思うのだが、どうしてこうも反応があるのか、と不思議。で、つらつら考えてみるに、「故郷は遠くにありて思うもの」つまり、中にいて感じるのと、外から見て感じるのは違うのではないか、と思いついた。

そういえば高知を出た故に、初めて認識できた高知っていっぱいあるように思う。その一つは空気の甘さ。久しぶりに自転車で市内を走っていると風は楠の芳しい香りをいっぱいに含んでおり、ああ、すごい街だと気づく。住んでいた時はそれこそ、ただの空気だったのに。陽射しの強さも相当なもの。冬に帰っても信号待ちで南国だなあ、と実感するほど肌を射してくる。こんなこと、住んでた頃、感じたことあったっけ？当たり前に食卓にのる野菜の味もとても濃い。思わずまじまじとキュウリを見つめ、一体東京で私が食べてるキュウリって何物？と思ってしまう。

●

何より驚いたのは、距離感が変わってしまった自分を発見した時。東京の我が家から駅までは早歩きで十分。電車で池袋まで二十分。新宿、東京駅まで五十分。これってかなり便利な場所に住んでいると自覚して数年間、そんな私が高知に帰って、移動してみるとかなり遠いと感じていた場所が徒歩で十分で行けると知った時の驚き。長いと思っていた帯屋町が一つの駅構内を歩くのと同じ位の時間で抜けられると分かった時のショック。これっていうのは高知で生活していた時には絶対に実感できなかった距離感だと思う。

こう考えると高知というのは案外思っているのと違う面がもっとたくさんあるのかもしれない。物体は変化を感じやすいからよく分かるけれども、人に接する時は私の中にアダプターがあって土佐弁に変身したとたん、土佐人として客観性を欠く中の人間になりきってしまっているのかもしれない。だから本当はすぐ側にいる面白くて変な人物に気づかないだけかも、なんて考えてみる。

●

ここまで書いて、はた、と思い当たった数カ月前の出来事。所は甘いデートのカップルの多い天下の井の頭公園。その闇をつんざく土佐弁の声。人だかりもして何ごとかと思って近づいてみれば、夜目には分からないけれど昼間はどぶのような汚い池に、数人の土佐弁の若者が飛び込んで泳いでいる。周囲の人はおっかなびっくりの好奇の目。若者どもは一向に構わぬ様子で通りかかった外国人にめちゃくちゃな英語で「今私が飛び込むからおまえも泳げ」なんて難題をふっかけている。その時私は「土佐寮の学生はちっとも変わってないんだな」という感想程度で通り過ぎてしまった。

今、あの好奇な視線に立って客観的に考えてみれば、前世紀の遺物みたいにひどくバンカラで変な学生たちだと改めて思う。そうか、こんな人間がいるのが土佐なんだなと思った途端、それをおかしいと思っていなかった自分がよく見えた。えっえー！　ということは、本当は一番身近にいる最も変な土佐人って私という可能性もあるってことー!?　案外質問者の反応は私自身への第一印象だったのかも。今度から出身を聞かれた時の反応を、もっとよく観察しておく必要があるようだ。私と同じ経験のある土佐の方々、御用心あれ。

（コンチネンス研究会長）

野中兼山と百姓たち

竹原　清昭

野中兼山は三百数十年前、土佐二代藩主山内忠義に仕え、奉行職として三十余年間、藩の執政にあたった。その間彼の行った事業は大規模なもので、後世に与えるところ極めて大であった。兼山唯一の述作といわれる『室戸湊記』の中に「賢君のその民を労するゆえん、その民を逸するゆえん、皆その道を得たるなり」と述べており、兼山はひたすら民の安けきを念じて為されたるものであったと思う。

しかしその結果は、彼に対して全く正反対の評価があるのも否定できない。一つは彼をして無比の経世家、実業家という論と、一つは領民収奪の鬼と解するものとがある。その正否は別として、ここでは大事業の陰に苦労や労役を強いられた百姓たちについて記して見ることにした。

さて野中兼山と伊野とは深い関係がある。即ち仁淀川を伊野で塞とめて八田堰、鎌田堰を築造し、更に弘岡井筋、鎌田井筋の用水路をつくり、高東、吾南平野に合わせて千数百町歩に及ぶ新田を開発したのであった。まさに画期的なことである。兼山は八田、鎌田堰の構築に際し、上流に被害が起こらないよう色々と工夫をしたが、究極的には解決されず、以後伊野枝川地区や日高村が洪水の度毎に浸水し百姓達は苦しめられた。

また、堰や井筋の造られるにあたって労役が厳しく苛酷に過ぎ、次のような苦労話が残っている。

「古糞の皮を剝ぐ」～連日の力役に疲労して休憩を願ったが許されず、一策を考え、〝便を催うした〟と申し出て僅かな時間でも休息した。ところが我も我もと申し出て、終には他人がした古糞の皮を剝ぎ自分がしたようにして休むようになった。後にこれも発覚、鞭で打たれる仕儀となった。これ程労働が酷であったといわれている。

「いもじの十連」～いもじ（里芋の茎を干したもので農家の貴重な食料品、これを岩の上で焼くと岩が柔らかになり工事が捗るという）を戸毎に十連宛供出させて百姓たちを困らせた。それよりいやな顔を「イモジの十連顔」というようになった。

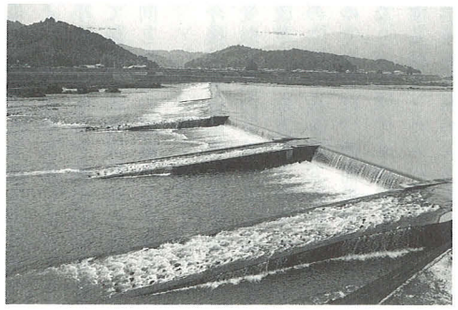
他に、〝吸江五台山は仏の島よ、並び高知は鬼の島〟といわれたり、井筋の底固めの、いわゆる〝千本突〟は共同作業で間断なく続けられたので、残酷物語として残っている。

また堰、井筋が完成後も洪水のため壊れた時は、周辺の百姓が夫役として使役させられ重い負担となった。

寛文三年（一六六三）に〝酒造制限令〟の御触が出され、正月、冠婚葬祭の他は飲酒を禁じ、飲酒の量に応じ罰金を課した。「赤面三匁、生酔五匁、千鳥足十文」である。領民にとって酒は一日の労働の疲労回復の良薬で楽しみでもあった。だから密造も多くなり運搬用に肥桶を利用した。しかしこれも役人が知るところとなり、ある日吟味して蓋をあけ舐めて毒味をしたら、本物の尿であり慌てて舌を地面にすりつけた。百姓たちはこれを見て笑いが止まらなかったと伝えられている。

一方労役についても年を追うごとに夫役が多くなって、遂に百姓の中には夫役に堪えかねて家を逃げ去る、いわゆる〝走り者〟が出る始末となった。これは重大なことである。

横川末吉氏はその著『野中兼山』で「本百姓の没落を示すもので、兼山施政の誇るごとく農政の成功とはいえない」と指摘している。



八田堰

兼山は事業遂行のためには独断的で休むことなく、飽くことなく、三十余年間続けられたので百姓たちは疲れ果て、生活に苦しみ、また種々の掟の触に日常の生活は制限され、遂に兼山をして収奪の鬼と化したと思ったであろう。こうした声や動きが兼山失脚へと連なっていったとみることができよう。兼山の大事業の陰には領民達の血ともいうべき苛酷な労役があったのである。

〝緑陰や農夫が憩う兼山址〟

（伊野町立図書館長）

学校週五日制

柳瀬　康

予想以上に大きな関心と論議を呼びながら、九月十二日㈯学校週五日制はスタートした。今は月一回だが、いずれは完全週五日制に移行するようだから、この日はわが国の学校教育史上記念すべき日となった。

スタートはしたものの、実施に当たってはさまざまな問題が指摘されている。

特に本県では、企業の週休二日制実施が遅れている点や、共働き家庭の多い事などから、子供を家庭に返した場合、子供が野放しになりはしないかとの心配。また、国公立や有名私立大学への合格者数が少なく、私高公低といわれる学力問題への不安などがあげられている。

この制度について、実施主体の文部省は「子供達の社会体験や自然体験の時間を多くし、子供達自身の主体性を高める機会とする」とか、「子供を家庭に返し、家族や地域の教育力を回復する」とその趣旨を説いている。いずれも今の子供達にとって重要なことに違いはないが、休日とするからには、子供達に今以上の心身両面の負担がかからぬようにすることが教育的、文化的な対応といえるのではなかろうか。

この日、私はたまたま乳幼児の二人の孫のお供をして、家族と県立のいち動物公園を訪ねた。「ふだんの土曜の三、四倍の入園者」と報ぜられたとおり、児童生徒に無料開放されたこともあって、なかなかの賑わいであった。中に、小学生らしい親子連れも多く見られたが、そのほとんどが低学年の子供達で、高学年らしい姿は余り見かけなかった。施設の対象者の年齢を考慮したとしてもいささか寂しい光景であった。

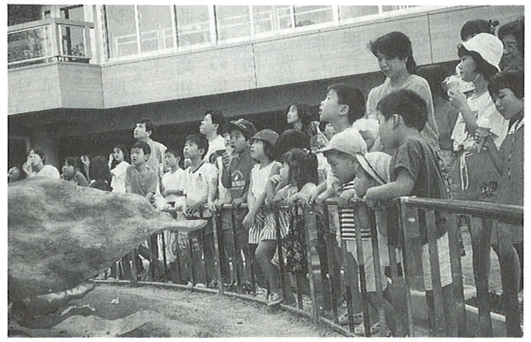
県下各地でさまざまなイベントも用意されていたようだが、子供達は一体この日をどのように過ごしたのだろうか。

考えてみれば、週五日制の趣旨と本県の問題点、特にいわゆる学力問題とは、指向する方向が必ずしも同一ではなく、現状のままでは、両面を同時にカバーすることは至難のわざだという気がする。

鹿児島県のある高校では、この日模擬試験をやるとかで問題になったし、塾の中には、一部で宿題を多く出したり、午前中から授業をした所もあったらしいが、大部分の塾が平常通り冷静に対処したという。

が、この状況が今後も続くという保証はどこにもない。

また、五日制のスタートは公立校のみで、私立校は未実施といった問題もある。



のいち動物公園

学力問題は、確かに直接学校教育に関わる問題である。そのため、授業時間の確保はもちろん、毎日の授業の計画や内容の改善など質的な面についても学校が真剣に取り組まねばならぬことはいうまでもない。その意味で学校に課せられた責務は重くかつ大きいといわねばならない。

しかし、その取り組みの成果が、即入学試験の結果に直結するかといえば、単純にそうなるとは限らないところにこの問題の複雑で困難な点がある。いいかえれば、今日の入学試験への対応には、学校の授業のみではカバー出来にくい面（非教育的・非文化的となる面も含めて）があるということである。このことは特に小学・中学など義務教育段階において顕著であり、明らかに文化的な方向とは逆の現象として現われている。

今後、五日制の推進と並行して今の受験体制の改善を含む抜本的な教育改革への取り組みが不可欠である。このことを抜きに五日制のみを進めてゆくならば、両面の隔りは一層大となり、すべて子供にしわ寄せが集中する結果となるのは確実であろう。

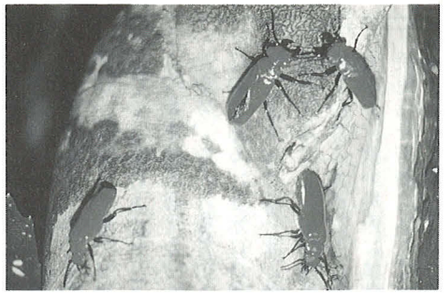
学校五日制の目指す方向は教育的であると共に文化的でもある。子供達が真の文化的恩恵に浴することの可能な五日制を、真剣に模索することが私達大人の課題であろう。

（㈶高知市学校給食会専務理事）

ヒラズゲンセイ

—なぞの甲虫を追う—

吉松　靖峯



ヒラズゲンセイは、ツチハンミョウ科の甲虫で、体長は三センチ前後、血赤色をした、非常に美しい甲虫で、高知県を代表する虫として有名である。

昭和十年に高知県で発見され、その後沖縄・鹿児島・徳島・和歌山の各県で発見されている。

発見後すでに六十年近くたったが、まだ生活史が解明されていないナゾの甲虫である。

最も採集例の多い高知県においてさえ、年に多くて数カ所、散発的に発生が確認される程度であり、一頭も確認されない年があるなど、なかなか調査が進展しないのが現状である。

更にこの甲虫は、民家の高い軒先にあるクマバチの巣の入り口やその付近で発見されることが多く、クマバチへの寄生を考えさせるような行動をすることなども、余計に調査を困難にしている。

私もこの甲虫には大変興味を持っていたが、発生場所に出合うチャンスがなく、まったくお手上げの状態であった。

昭和五十六年、高知市桟橋通に子ども科学図書館がオープンし、その折、昆虫標本の収集の手伝いをさせてもらったが、幸運にも、昭和十年にヒラズゲンセイ発見のきっかけを作った杉原勇三氏より、貴重なヒラズゲンセイ標本及びクマバチの標本を寄贈いただき、この甲虫研究へのとっかかりを得ることが出来た。

以来、過去に発生した場所の現地調査をしつつ、発見のチャンスを待っていたところ、平成二年に土佐市北地の小関高明氏よりヒラズゲンセイらしい甲虫がいるとの連絡を受け、長年の夢であったヒラズゲンセイに出合うことが出来た。

その後同年に土佐市永野で、次いで平成四年に、高知市中秦泉寺、高知市大津、安芸郡馬路村、吾川郡吾北村上八川と、県内各地より連絡をいただき、発生の確認をしてきたところである。

この間、二百八十頭近いヒラズゲンセイに出合い、観察する機会を得た。これによってナゾのヒラズゲンセイの生活史をかなり解明出来るのではないかと期待したところであるが、結果は逆で、ナゾが増すばかりという状況になっている。

発生時期、発生場所についても、過去の研究では、五月下旬から七月中旬まで、海岸地帯に発生となっていたものが、吾北村では八月に発生が始まり、その内の一頭は八月三十一日まで生存していたこと、また、馬路村、吾北村上八川は海岸地帯でなく、内陸山間部での発生確認となり、根本的に考え方を変えなければならなくなっている。

更にヒラズゲンセイはクマバチの巣内で蛹化するものと考えられているが、私が観察した限りでは、どこからか、クマバチの巣に飛来するケースがほとんどで、どこか別の場所で発生し、クマバチの巣へ集まって来ているようにしか見えないことが大変気になるところである。

クマバチの巣に飛来したゲンセイは、クマバチの巣に入り産卵、十日ほどで孵化し一齢幼虫となり、巣から飛び出ようとするクマバチに何十頭もしがみつき、飛び出していく。

ヒラズゲンセイの発生がみられるクマバチの巣付近の花には、ゲンセイの幼虫をたくさん乗せて吸蜜に集まっているクマバチを見ることが出来るが、幼虫が花へ着陸するのは、まだ確認されていない。

ヒラズゲンセイの幼虫は、クマバチにしがみついてどこへ移動するのか、このナゾはすぐにも明らかになるような気もするし、また、何十年もかかるかも知れない。

ナゾのままがいいという気持ちもあり、複雑なところである。

（地方公務員）

狭い歩道の植樹帯

谷　是

高知市の歩道の狭さは、他都市にいた人なら等しく感じることであろう。それに加えて、並木の下にある〝植樹帯〟が一層狭くしている。アベリアやヒラドツツジなどが多いが、木が邪魔になって歩けない。それに向こうから自転車が来る、バイクや自転車をおく。障害者のための路面表示など意味をなしていない。県庁前から播磨屋橋に至る本町筋は最も狭く、交通量が多い所である。雨の日などは傘をさして歩けないばかりか、晴れた日でも、並んで会話を楽しみながら歩ける道ではない。そんなところに、なぜ植樹帯を置くか。木の下には、空き缶がころがり、むしろ街を汚している。街には空間が必要である。並木には根元に魅力がある。舗装を、水を溜めない水が浸透するものにかえ、植樹帯をなくし、並木をながめ、会話を楽しみながら行ける歩道にならないか。広い場所ならともかく、狭い場所に植樹帯を置いて、むしろ市民生活を苦痛にさしている。なんでもつくればいいものではない。

並木といえば、ヤシの木をやたらに植えた時期がある。南国土佐のブームを演出しようとしたものだが、本来、土佐に一本もない樹木をやたらに植えたことは、いかにも愚行である。宮崎ならいい。ヤシの自然林があるからである。ことにヤシは枯れ葉がブラ下がって美的ではない。ハワイや東南アジアの木など、もっと切って整理し、単純でもいい、楠など土佐古来の簡素な並木にしてもらいたい。土佐を異国にしてどこがいいのだろう。

高知城の夜間照明や潮江橋の豆電球などをのべつ灯しているのは、どういう意味があるのだろう。ああいうものは、何かのイベントの期間、美しく照らして、初めて意味があるのである。休むときは休み、演出するときは演出する。その変化に意がある。観光のため、のべつ照明するというのは、どうかと思う。美しいければいいというものではない。

私は播磨屋橋の朱塗りの欄干は、なんとかならないかと思い続けている。いつからあんなものができたか知らないが、お稲荷さんでもあるまいし、いかにも安っぽい。目につかないから……という人もあろうが、本来あの橋は目につく橋ではない。もっと品格のある欄干にならないか。京都などは多くの橋があるが、それぞれに品位があって面白い。内側にあるあの朱塗りの演出は低俗で、土佐人の観光に対する低意識を露呈しているようなものである。

作品が立派であるが、あそこにはいらないというのが、吉田茂の銅像である。空港の入り口は、早くはいる所であり、早く出ていく所である。あそこで車を止めてゆっくり銅像を眺めている人を、私は見たことがない。まして歩行者は皆無である。

せっかくの立派な作品が、場所が悪いために死んでいる。高知公園か中央公園かに移す勇気がないか。行政に英断を期待したい。あそこを通るたびに、ポッツリ立っている見る人がいない吉田茂の姿が、私には気の毒に思えて仕方がない。私一人の感慨だろうか。

（高知新聞企業情報調査局長代理）

価値判断

市川　博和

私の診療所の看護婦さんは開口一番「引き出物やお返しの習慣、あれは無駄ですね」、家内に聞いたらやっぱり「義理で出席せねばならない結婚披露宴は結婚挨拶状で十分」とのこと。アンケート流行の御時世ですから、まず、身近な人間のご意見を尊重し考えてみよう。バザーに行くと時々、出ているそうだ。しかも、何々家・何とか家結婚披露記念などと金文字でしっかり書いてあったり、改めて眺めると何か物悲しい金杯・銀杯であったり、漆塗りの入れ物であったり。もらった家では不要の品である。何々記念とか、何々家とか書かなければ、バザーに出しても、お回しにしても使い易いかもしれないが、これでは買い手も、もらい手もつかない。一工夫した祝宴を思い出せば、引き出物のメニューを出席者に配布し、お好きな品物に○印をどうぞという趣向。そこで、遠慮なく選ばせて頂いたベルトが後日送り届けられ、今でも重宝している。後で聞いてみると、あれは良いアイデアだと言う声に交じって「ずうずうしく○印を付けては失礼かな」と気配りした人や、奥様のために掃除機を選んだ人もいたが、送られてきた掃除機を見て当の奥様が「嫌み？」と誤解されたらバザーに並んだかもしれないが、これは余計な心配だった。

『こんなものはいらない』は人それぞれの価値観の相違で微妙に異なる。昔の人間が作ったエジプトのピラミッドにしても、日本の古墳にしても、アテネの神殿にしても、何で馬鹿でっかい墓や神殿を作るために重労働に駆り出されなければならないのか、考えた当時の人間もいたはず。大宴会にしても、引き出物にしても、それを商売にしている人達には、これがなくなっては死活問題。その意味でも一概な廃止論は賢明ではない。人の作った物や生活習慣で意味のない物は存在するはずもないが、その価値観となれば別問題。しかし、価値観の違う人々が多様に生活する社会は一色に統制された全体主義社会よりは健全で、世界史を振り返れば明らか。アメリカから来た女子高校生が「日本のホームステイのご家族は親切でうれしいのですが、学生服は嫌いです」とつぶやいたことを思い出す。高校生ともなると、没個性的な年齢ではないのだ。誰も彼もが一色の学校の制服、未だに過去を引きずる日本人の価値観を教えられた。

段々、週休二日制が浸透してくるが、わが国の子供達も何に価値を見いだせるか、自分で考え、間違いのない判断で、自信をもって、はっきりと主張できる立派な子供達になって欲しい。未来を背負う子供達を、個性的な価値観をもった人間に育てよう。

（高知市医師会理事・高知県医師会広報委員）

調査

英保　迪恵

テレビに松坂慶子が出ていた。彼女は結婚していて子供がいるらしいが、両親は相手が気に入らず結婚に猛反対、揚げ句の果ては娘に絶縁状を送ったとか。私は四年前を思い出した。長男が結婚するという。よかったねえ、それでどんな人？と尋ねた。映画雑誌社に勤めていると聞いて、息子とウマが合うのだと納得した。栃木県出身と聞いて行ったことのない土地を面白がり、お父さんは脱サラで農業に従事していると聞いてますます面白がったことだった。調査なしでも息子夫婦は仲よく楽しく暮らしている。息子の気持ちを大切にして、先入観をもたず結婚を祝福したかった。

次男が東京でアパート住まいをしていて、家主の都合から急な立ち退きを要求されたことがある。一方的な話だから立ち退き料を請求するつもりだと電話があった時、私は、あの内気にみえた息子がそこまで強くなったのかと頼もしく、うまくゆかなければ民事調停を申請する方法もあると話した。それがいつのまにか立ち消えたので理由を聞くと、黙って出れば就職の調査がきても悪いことは言わないが…と家主が言うので止めた、ということだった。家主の脅迫まがいの言葉に怒りを覚え、それに屈した息子に哀しい思いをしたことだった。

一カ月程前、住んでいる地域で正義の味方とばかりある運動に加わった。ところが子供の就職、縁談に差し支えるので主婦は噂話はしても公の場では発言しない、行動しない、それが主婦の知恵だという人がいた。そんなある日、次男が受験した会社の一つからだろうか、近所へ私達夫婦に関する調査の電話があったという。現時点では私に関する限り評価は両極端ではなかろうか。運動に賛成の人からは慰労されても反対の人からは白眼視され、匿名氏からは住民を扇動挑発し、支配を企んでいるという文書まで配られている。その匿名氏や反対の人に調査の電話がかかってきたらどういうことになるのだろう。息子の人格や能力とは全然関係のない親を調査して、しかも相手によっては正反対の結果が出るような調査で息子の就職が左右されるのだろうか。

言いたいことも言えず、したいこともできないような生活に人々を追いこむような、そんな調査は要らない。

（主婦）

私の昭和③

農に生きて

竹島　愛子

古い日記帳がある。昭和十六年当用日記第一頁「元旦」『二千六百一年の朝は遂に明けはなれたり、五時のサイレンと共に飛起き氏神様えお参りに行く。今日は元旦事業として親友西内一子、西八重喜さん達と三宝山へ初日の出を拝みにいった。しづしづと上る様は、ほんとうに皇国の姿の様をあらはせり、万才を三唱し、はるかに皇国のいや栄を拝み帰途についた』（原文のまま）

私が小学校六年生の三学期を迎えた元旦の日記である。以後、毎日日記帳には五時起床、氏神様参拝、勉強、家事手伝い、友達との草履つくり、出征兵士への慰問文、出征家族への手伝い、下駄ばきで登校して冬の寒い中を裸足で朝礼に出た、等々書いてある。日中戦争最中の当時の小学生の姿が思い出される。

昭和十六年四月県立第二高等女学校入学、その年十二月八日寒い校庭で朝礼の時、校長先生より真珠湾奇襲をもって太平洋戦突入のお話しを聞いた。当時としては深い意味は分からぬままに緒戦の戦果に感激し勝ち抜かねば、頑張らねばと思ったことであった。花の高女時代という言葉もあった。戦争たけなわとはいえ入学当初はクラブ活動もあり、スポーツ好きの私は勉強を忘れてスポーツに熱中、夏は顔の皮を何度もはがすくらい水泳にバレーボール（当時は排球）に励んだ。二年生の時、先輩に交じって当時の県下女子中等学校体育大会に出場した。女子師範と第二高女がまだ同居していた時代であった。女師第二のマークのついた体操服、ブルマース、青い空澄み切った空、拡声器からひびいてくる『秋の空豊かに澄みて…』の大会歌、試合のあった思い出の第一高女校庭!!花の青春。スポーツに熱中した私の最初で最後となった大会出場だった。

戦争はとどまることなく昭和十九年学徒勤労令のもと、勤労学徒報国隊として大阪の軍需工場に行くことになる。その日十一月十日の夕暮高知埠頭は当時の中学生、女学生でゴッタがえしていた。そして大阪に着くと、臨時列車でそれぞれの工場に向かった。霜月のよいやみの中、沿線のかがり火が今もハッキリと浮かんでくる。このようにして私達の学生時代は帳面には「努力」「努力」と気持ちを記しながらも勉強らしい勉強は出来ず、軍需工場で旋盤工として頑張ること数カ月、二十年三月繰り上げ卒業となり、寮で式らしくもない卒業式を終えてまもなく、大阪大空襲に工場も寮も焼け野原となり、命からがら帰郷した。直後七月四日の高知空襲、筆山下にあった校舎の焼け跡に立った日の悲しみは今も忘れられない。八月十五日の終戦、学生時代は終わった。

野を山をかけずり回った想い出の故郷を後に、昭和二十一年四月、十八歳の春、私は縁あって見知らぬ土地布師田に住むこととなる。夫は台湾からの復員将校だった。当時は食糧難の時代、米は作っても充分に食べられる時代ではなかった。強権発動のもと供出を強いられる時代であった。農地改革の中で、もてる土地七反だけを残されたこの家はそれまで農業をしたことがなく、私が嫁いで初めて農業に取り組んだのである。夫は公務員として勤め、私は農業を仕事として家庭生活を始めることとなる。体力に自信のあった私には農業が適していたかも知れない。三人の子育てもやさしい姑に助けられ、毎日の仕事も暑い寒いを感じる間もなく米、麦、なたね、芋等、田畑は休ませることなく次々と作物を育てていった。しかしそれまでは地主で教育者の家だったので、百姓の道具はなく買うにも物もなければお金もなかった。

新円切り換えの中での農地改革、おまけに長い間務め上げた舅の恩給は当時ヤミ酒二、三升しか買えない時代、ヤミ行為をことわって真正直な生活をしていて栄養失調で倒れた判事のニュースもあった。舅はとてもやさしく金縁の眼鏡をかけ、髪を七・三にキッパリと分け、みるから

に上品な先生タイプであった。なれない仕事の中『愛ちゃん休もう、休んでしよう』と何時も声をかけられ、私は休む必要もないのに舅と並んで畦に腰をおろした光景も思い出される。慣れぬ仕事が舅の体をむしばんだろうか、昭和二十三年に農地改革のあおりの中に心を残しつつ他界した。

舅の作ってくれた道具の一つに車力があった。軍隊の払い下げの大きな金の輪を使って稲や麦を運ぶ荷車を造ったのである。隣の農家ではゴム輪のついたリヤカー、牛で引く荷車等楽々と運ぶ道具がある。ある日私がこの大きな金輪をつけた車力に麦束をのせて汗水たらしながら一人で坂道を運んでいると、近くの農家のおばさんが『まあ、おまさんは年もいかんのにえらい、牛になり馬になりして働くが…』。

この言葉が私の農業に対する大きな発憤となって忘れられない言葉となった。牛馬で終わりたくない。魂の入った自分の仕事をしたい。この信念は私が農業をしてゆくうえでの大きな支えとなった。泥にまみれ、汗にまみれてする農業を、私は一度もきついうるさいと思ったことはなかった。自分の仕事として子育てをするにはプラスになる場面が沢山ある筈である。物より心の大切さ、土に親しむことによって物を育てることと人を育てることは相通じる道であるということが分かる。この素晴らしさを農業者は今一度見なおして欲しい。

昭和三十年代は生活改善運動、愛妻田、一俵増収運動と、いろいろな言葉の中で農業も華やかな時代があった。子供達も成長するに従って収穫時には大きな労力源となった。二期作も当然の如く「年にお米が二度とれる」この言葉に愛着を感じた時代も懐かしい。しかし四十年を過ぎる頃より米の減反政策とか、古米古々米という聞きなれない言葉が出はじめた。中学、高校、大学と夏休みはきまって農作業を手伝ってくれた息子達が社会人となる頃から、農業は次々と大型機械化されるようになった。

牛になり馬になりした農業の時代は、語り部の中にしか残らなくなった。新農政策の中に展開されようとする日本農業であるけれども、私は「農は国の基なり」の信念に変わりなく、自然と調和した人間生活が農業の中にこそ営まれることに誇りをもっている。

子育ても終わった昭和四十四年から、私は農協婦人部組織活動に取り組むことになる。はじめは皆目分からぬままに、人には迷惑をかけられない気持ち一杯の毎日であった。最初に取り組んだ私の活動は、組織活動の中に県下バレーボール大会のあ

昭和十七年県下女子中等学校体育大会

会連続二十回出場を果たし現役引退、学生時代に果たせなかったスポーツの夢を四十歳を起点として仲間づくりの中に励んだ二十年間、この間に三位、二位、優勝といくつかの賞状を仲間と共に手にした思い出は懐かしい。今年は第二十五回農協婦人部バレーボール大会が十一月六日春野体育館で開催される。この日は私の青春の一日である。

今一つ貴重な体験を振り返る。国際婦人年にあたる昭和五十年、第五回青年の船に参加しフィリピン、香港と船上生活の中から、また現地での研修の中から学んだことが私の組織活動に没頭するきっかけとなった。研修の場で、学習の場で学んで得た知識を仲間に還元していくこと、これが組織活動リーダーの大切な役目だと私は思っている。

振り返るとアッと思う間の半世紀、きんさん・ぎんさんではないけれども『気力!!気力!!』、この言葉をかみしめながら、神秘の世界から人を生み育てる天性を与えられた女性のしなやかさとしたたかさの中で、農業に生きたわが人生が些細であるけれども地域社会の土壌づくりの肥やしとなって、農村婦人の自らの輝きになるよう多くの仲間と共に頑張りたいと思っている。

（高知県農協婦人組織協議会会長）

高知の山と森 (四)

寒風山と笹ヶ峰

西村　武二

「四国三郎」、吉野川の最上流に位置する本川村は高知県で最も標高の高い山村である。

高知県には一、七〇〇メートル以上の高山が十六座あるが、その内本川村には標高一、八九六メートルの瓶ヶ森を筆頭に十二もある。これらの峰々は手箱山を除けばすべて西から北にかけての愛媛県との県境に連なっている。南側は筒上山から戸中山へと延びる標高千メートル前後の稜線が、吉野川を仁淀川水系と分けている。吉野川下流の本山からの交通もかつてはままならなかったという。このように天然の障壁に囲まれて、近世以前は「およそ是より西は予州松山御領。北は西条並びに御蔵所（幕府天領の別子山のこと）に隣る四国第一の深山幽谷なり。昔は土佐にもあらず、伊予へもつかず、河水はことごとく阿州へ流るるといえども阿波へも属せず」と『寺川郷談』（一七五二年）に記されたように、それほど僻遠の地であった。

しかし今や村内を縦貫する国道一九四号線は、四国の太平洋側と瀬戸内を最短距離で結ぶルートとして改良工事が進められ、路線周辺の景観ともよく調和した県内きっての美しい道路となっている。その国道を北上して、県境に近づくにつれ寒風山、笹ヶ峰、冠山と続く秀麗な山々が現れて来る。国道筋からこのような高山のほぼ全貌が見られる場所は県内では珍しい。

寒風山から笹ヶ峰、冠山、平家平へかけての稜線部、斜面上部にはブナ林、ウラジロモミ林からシコクシラベ林、ササ原、コメツツジ群落まで、四国山地の代表的な冷温帯・亜寒帯の植生がみられる。植生がやや貧弱なためか、国定公園の次善の策として環境庁の自然環境保全地域に指定されている。

寒風山トンネル南口が登山口となる。落葉広葉樹の二次林の中、急斜面につづら折りのよく踏み込まれた道が上へ上へと伸びている。この桑瀬峠への道は西のシラサ峠とともにかつて最もよく利用された伊予越の往還である。日用雑貨、食料品、そして木材さえ人の背でこの道を越えて運ばれた。大正の末に吉野川下流の本山方面から物資が入るようになるまで人の往来は盛んであったという。

斜面が急なだけあって高度はどんどん稼げる。木の間を通して左手シドウ谷の赤茶けた崩壊地が稜線近くまで迫り、緑のササ原が深くえぐり取られて痛々しい。この崩壊はシドウ谷の黒滝銅山の採掘に端を発しているという。本川村史によれば江戸時代十八世紀前半に事業が行われ、その後中断して明治になってからまた採鉱されたようである。粗銅の製錬のために大量の薪炭材が伐採され、製錬の過程で発生した亜硫酸ガスがさらに周辺の植生を破壊したためである。

一時間足らずでササ原の桑瀬峠に登りつく。登山口からここまでの間の森林に大径木があまり多く見られないのは、上述のような理由によるのだろう。

ここから寒風山、笹ヶ峰まで尾根を忠実にたどることになる。

峠から一段上に登ると尾根は平担となり、ここでやっと森林らしいブナ林に入る。岩尾根をたどり左右に巻きながら登りつめる。頂上近くにはナンコクミネカエデ、ナナカマド、ダイセンミツバツツジなどの低木林となる。頂上は西条側の岩壁からは予想もされないなだらかなササ原となり、コメツツジが散在している。ここから笹ヶ峰、冠山、平家平へと素晴らしい眺望が展開する。高知県側の斜面上部はほとんどがササ原となっている。その下部はウラジロモミ林や落葉広葉樹林に連なり、造林地と散在する伐採地の人工的な直線で区画される。およそ標高一、二〇〇メートル前後を境に大部分が自然植生の国有林と人工林の民有林に分けられる。この桑瀬川流域一帯が西熊や面河渓谷のように深い天然林であればどんなに素晴らしいかと思うが、過去のすさまじい森林破壊からすれば天然、人工を問わず森林で被われていることを喜ばなければいけないだろう。

元禄四年に始まった住友による別子銅山の開発が盛んになるにつれ、製錬用の木炭の需要が増大し、炭窯と炭材の伐採は国境を越えて本川郷まで広がっていった。粗銅一トン作るのに薪六トン、木炭四・八トンを必要としたという。炭材の重量の一～二割相当が炭になるので、粗銅一トンを生産するためには薪も含めると三〇～五四トンの薪炭材を必要としたのである。

ところで粗銅の生産費は一体どれぐらいであったのだろうか。例えば江戸時代の最盛期で年産一、五〇〇トン、少ない時で六〇〇トン前後、ここでの製錬の最後の年になった明治三十二年には三、九〇〇トンという。したがってこれに要する薪炭材は莫大な量となるが、これが周辺の森林から調達されたのである。しかもこの製錬は元禄四（一六九一）年から明治三十二（一八九九）年まで二百年間も続いたのである。森林からの木材の収奪は言うまでもなく、焼窯からの煙は周辺の山々に回復不可能と思えるほどの煙害地を残すことになった。

明治三十二年八月二十八日台風による集中豪雨のため、県境尾根を越えた別子山村では、全山禿山となった煙害地の山崩れで大惨事が起こった。死者五一三名、流失倒壊家屋一二二戸、この日別子銅山の日雨量は四一七ミリであったという。森林の破壊が未曾有の大惨事を招いた災害史上有名な出来事であった。

この時桑瀬でも山崩れが起こり、六〇名の命は一瞬の内に泥流に消えたという。黒瀬銅山の煙害、別子銅山からの越境の煙害、さらに薪炭材の過度の伐採により森林にはもはや山崩れを防ぐ力は残っていなかったのかも知れない。

笹ケ峰から寒風山を望む

このような地域に営々と植林し、現在見られるような立派な森林にまで育てあげたのは本川村の人たちである。彼らの苦労に感謝しなければならないだろう。

寒風山からは右斜面がササ原、左斜面が落葉広葉樹の痩せた尾根をたどって笹ヶ峰へ向かう。頂上に近づくにつれ広い尾根となり、雪と寒風で刈り込まれたコメツツジがササ原の中に点在し、あるいは尾根を縁どり、足は急に軽くなる。東のチチ山との鞍部には小面積ながらシコクシラベ林がある。石鎚山と剣山の間に島のように残された高知県で唯一の亜寒帯林である。ここから先は、チチ山の斜面を横断して、再び稜線に出てササ原の気持ちのいい尾根道が冠山、平家平まで続いている。

この道は「国境歩道」と呼ばれ、四国の国有林を管理する高知営林局によって開設されたものである。東は大川村の小麦畝からはじまり、平家平、冠山、笹ヶ峰、寒風山、さらに西へ瓶ヶ森、伊吹山と土予国境の峰々を延々と結んで土小屋に至る、総延長実に三〇キロに及ぶものであった。営林局は大正の末から昭和のはじめにかけて歩道を整備して登山の指導をしたのである。森林の管理・経営を本務とする営林局が登山指導に乗り出した目的は登山の振興を通じて愛林思想の啓蒙、森林への理解を促すということにあったと思われる。もちろんこの歩道は国有林の巡視道としても大きな役割を果たしたのである。この道のおかげで今日私たちはこの美しい眺望を楽しみながら登山ができるのである。

（高知大学農学部助教授）

清遠　幸男〈高知レポート5〉
高知県の工業　A5判・一一二頁　定価一、〇〇〇円

土居重俊監修　高知市文化振興事業団編
土佐弁　土佐日記　B6判・一三〇頁　定価一、〇〇〇円

岡林清水著
高知県文学散歩　四六判・二七八頁　定価一、八〇〇円

高知の文化を考える会編
高知の文化を考える　A5判・一八八頁　定価一、二〇〇円

高知市文化振興事業団編
わがまち百景　A5変・二二四頁　定価一、二〇〇円

高知県緑の環境会議森林研究会編
高知の森林　B5変・二二八頁　定価一、五〇〇円

筒井広道著
画帳の歳月　A5変・二五六頁　定価一、〇〇〇円

上森千秋著
流れと波の科学　A5判・二四〇頁　定価一、五〇〇円

土居重俊著
土佐日記　付方言土佐日記全訳注　A5判・一一八頁　定価一、八〇〇円

土居重俊・浜田数義編
高知県方言辞典　A5判・七三六頁　定価六、〇〇〇円＊

高木啓夫著
土佐の芸能　B5変・三四六頁　定価四、八〇〇円＊

清水孝之著
中山高陽　A5判・三六二頁　定価三、八〇〇円＊

外崎光広編
土佐自由民権資料集　A5判・三四四頁　定価三、〇〇〇円＊

今井嘉彦著〈高知レポート2〉
いかにすれば都市の河川はよみがえるか　A5判・一〇八頁　定価一、〇〇〇円＊

外崎光広著〈高知レポート4〉
土佐の自由民権運動　A5判・一五六頁　定価一、〇〇〇円＊

＊は税抜き価格です

お申し込みは最寄の書店か事業団まで

高知の文化を考える

まぶしき五十五階の窓

舩木　直人

暖かな春の陽をいっぱいに浴びて、温められた芝生に寝て、しばらく白い雲を眺めているうちに、うとうとしだしたが、ふと思いなおしてポケットから『草枕』を出して読みはじめた。

――山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟った時、詩が生れて、画が出来る。人の世を作ったものは神でもなければ鬼でもない。やはり向う三軒両隣りにちらちらする唯の人である。唯の人が作った人の世が住みにくいからとて、越す国はあるまい。あれば人でなしの国へ行くばかりだ。人でなしの国は人の世よりもなお住みにくかろう。越すことのならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれほどか、寛げて、東の間の命を、東の間でも住みよくせねばならぬ。

――画材を背にした男はやがて谷を見下し、雲雀が鳴くのを聞きつつ歩む……。

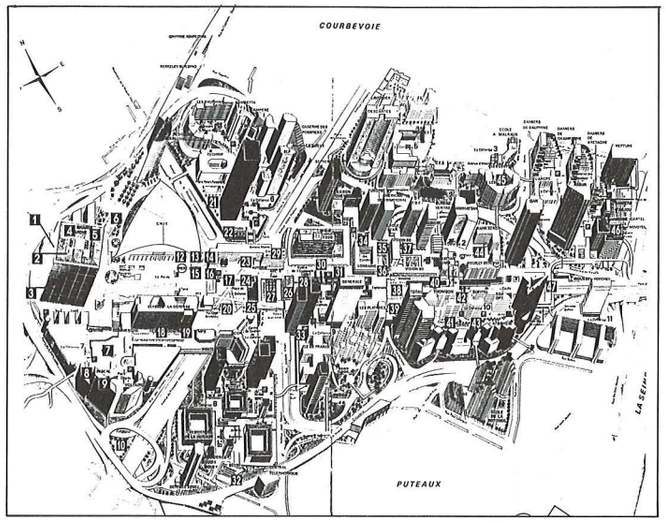
少年の頃から幾度となく読んだこの文を、また読んでいるうちに、なんとはなしに、昔への想いに引きこまれていったのだが、いつの間にか緑ゆたかで、美しく輝く高知の街を歩いていた。なんと独創的でローカル性の豊かな都市景観であることか。高知にしか見られぬ造形的作品が街中に見事に調和して置かれている。宮崎・大分や長野・仙台・札幌などとも、大きく印象が違う。そこで高知の街づくりはどの様にして進められたのかを情報センター（市民図書館）へ寄って調べてみることにした。知ったことや、感想を記しておこう。

高知の都市景観創造はどうも昭和時代末期頃から兆候が現れているようだ。市制施行百年頃の資料をもとにまずは世相から当たってみた。自由と民権を守り、育てようとする一方で、なんと規則の多かったことか。ルール詰めの中に人は生まれ、幼少の頃から受験の戦場に送りこまれて育ち、多くの校則の枠内で学習を強いられねばならなかった義務教育。通学、そして通勤路は交通戦争が行われていて、夥しい戦死者を出していた記録がある。一般的な住居は、ヨーロッパの人々から「日本人は兎小屋のような家に住んでいる」と言われていた。そのような民家に住むことでさえ経済的には厳しかったようだ。幾多の環境問題が指摘されていた中で成人となった若者達の中には、逞しく生きることを骨抜きにされてしまったと言われる非創造的な人々が、多く出ていたことも問題視されていた。若者達は、高知よりも更に汚染された環境状態の大都市へ出てゆかねばならなかったようである。昭和期末の高知の人々は、主にその様な世相、環境を自らの手で、いかに改善してゆくかを真剣に議論せざるをえなかった。ビルの高層化が始まっていて、広場・都市公園の必要性やその整備、ハイウエー・一般道路・下水道の建設、改修等々により都市環境の変動も激しかった。中央公園、高知市役所前、はりまや通りなどの地下に駐車場が出来たのは平成時代に入ってからである。

その頃、県外各地の都市ではすでに地下街の中に芸術的な広場を設置したり、街中の広場・道路には野外美術作品を設置し、スペースデザインにもかなり高度なものが出現していたこともあって、高知も都市景観の向上・芸術化を目指して「都市美デザイン賞」が設けられ、都市美創造に貢献している建造物には「賞」が与えられた。当初は建築部門が主となったが、後には公園・広場・街のたまり場（小広場）などの芸術化をめざしたスペースデザイン部門が設けられるに至って、野外美術（彫刻・絵画）が盛んになるきっかけとなった。地元作家・県外企業の嘱託系作家による作品が、その美を競い合うことになっていった。日本・世界の著名な作家による野外美術作品が設置される今日の基礎が造られたのだ。土佐に生まれ育ち、土佐で制作した地元作家の作品を設置、奨励したことは土佐独特の造形美を培う素地を育んだようである。

当時、つまり昭和末期・平成初期頃にはすでに存在していて、今日、土佐独特のスペースデザイン・野外美術（彫塑・絵画）の基本形になったと思われる作品を次に列挙しておこう。室戸地区―鯨舟・鯨車・亀と子の像、奈半利中央公園、ホタルの川（安田川河川公園）、空海像、中

岡慎太郎像。安芸地区―数々の「童謡の里」の碑、内原野焼による幾多の陶芸彫塑、伊尾木彫刻村の百数十点の彫塑作品、童謡の里シンボル像「春に聴く」山本正道作（安芸市役所玄関前庭）、岩崎弥太郎像。高知市を中心とした中央地区では、神の壺（龍河洞）、長尾鶏彫刻、土佐闘犬彫刻、サンゴによる数々の小彫刻や純信お馬人形。肖像の主な作品として、山内一豊の妻、武市半平太、坂本龍馬、板垣退助、牧野富太郎、吉田茂像などがあった。他にも各所に野外美術（彫塑、モザイク画、立体作品）が設置され、スペースデザイン的にも優れた作品が各所に存った。竹林寺には、かなり古くから野の仏が多数安置されていたようである。嶺北では野中兼山像が際立っていた。東津野の山中に、花の室町時代で京都五山文化に活躍した禅僧「義堂周信・絶海中津」像が赤松林に建立されていたし、中平善之進、吉村虎太郎の像が山の彼方を仰いでいた。佐川の五位山、越知桐見ダムの空間造形作品もまた画期的であったことだろう。幡多路にはトンボ・サンゴ・鰹にちなんだ民芸的作品の他に、当時から清流であった四万十川を縁とした数点があった。肖像としてはジョン万次郎、林有造の像があげられる。今に残るこれら数々の文化遺産があってこそ、今日の高知文化が誇りとする都市景観が形づくられたと思う。現在でも大規模な工事現場を囲う塀には絵が描かれるように、すでに当時においても工事現場、防波堤、パーキングタワー、などに絵が描かれて喜ばれていたが、それらの多くは小・中学生や高校の美術部生徒が教育の一環として参加したものであった。彼等の校舎・校庭は一般的には今日ほど芸術的・文化的な視覚環境には至っていなかったことが写真資料などで確かめられる。



パリ．デファンス　数字は野外美術作品解説ナンバー

一般社会においてカルチャー教室とよばれた社会教育的活動が起こり、美術・工芸に関する実技教室も賑わっていた。受講者の中からは本格的な制作に取りくむ人々が育ち、野外美術にも参加するようになっていく。街中の広場・たまり場・ビルの壁面、いわば公私にわたる公共的空間に陶・磁・金属・石など様々な材料のモザイク画などが彼等によって創造される基盤が出来つつあったのだ。昭和末期から現代に至る都市景観づくりの資料の一部を見た後、情報センター（市民図書館）を出て街中を歩いてみると、独創性豊かな高知の都市景観を造り出している古今の作品、つまり文化財の愛護・保存についての土佐人の資質がいかにすばらしいかを知らされた。台風・地震・豪雨などの天災、様々な人災があったにもかかわらず、この今日があるということを思うと、実に心温まる心境である。

一方ではセーヌ川に沿って、中世のノートルダム寺院、近世のルーブル美術館周辺、近代のエトワール広場とシャンゼリゼ周辺、そして二十世紀後半のアルシュを中心としたデファンス、そして現代の新パリ建設を思うと、その歴史的壮大な都市景観づくりに目がパチクリしてしまっていたところを、小鳥の囀りで目を覚した。うぐいすである。山つつじが明るく咲いている。ゆっくりと身を起こしてみると太平洋がキラ〳〵と輝いている。春がすみの青い空の下、遙か彼方、高層アパートの五十五階にあるわが家の窓がまぶしく光っている。ポケットに『草枕』をしまい、春蟬のなく赤松林を地下鉄「山下駅」の方向へ降りていくことにしよう。

（高知県展彫塑招待作家）

市民フロアのご利用を

広さ・内装　96㎡、壁面布クロス張り、スポットライト完備
所在地　高知市はりまや町一―五―一　デンテツターミナルビル5F
申し込み　高知市本町五―二―三　㈶高知市文化振興事業団に申込書を提出下さい。

文化のひろば――⑤

〝文教のまち〟の現代的再生

―佐川町の文化行政―

人権を尊重するまちづくりを根幹に据え、住民の広範な学習要求に応えるための『ルネサンス大学』、全国に数少ないユニークな『地質館』、初期の川田文庫からのものをはじめ、田中光顕とその子孫から寄贈された貴重な史、資料や西谷文庫が重みをもつ『青山文庫』の県立から町立への移管など、昔から文教の地として知られた佐川町で、いまその現代的再生を図る取り組みがすすめられている。

全町的学習活動になっている『ルネサンス大学』は、「佐川・ルネサンス運動」の一環をなすものである。佐川・ルネサンス運動というのは、きたるべき二十一世紀に向かって、豊かで活力ある文化の香り高い佐川町を建設するため、地域に内在する産業、技術、文化、資源などを掘り起こし、その「発展的再生」（ルネサンス）を、住民と行政が一体になって実現していこうというのだ。

基調は「人間尊重のまちづくり」である。周知の通りルネサンスは、十四世紀から十六世紀にかけて、イタリアをはじめヨーロッパ各地で展開された大規模な文化活動であり、ヨーロッパ近代精神の出発点となったものである。これこそが人間解放と人間的価値に強く固執する理性の明証性と信頼を求めるものであった。故に、神の支配するドグマからの人間解放が行われ、自由と平等、合理性と科学性を探究する学問・芸術の隆盛によって、文明社会が大きく幕明けされたのである。佐川ルネサンス運動も、こうした高い理念にもとづくものといえよう。

ルネサンス大学は平成二年度までは講演会中心のものだったが、三年から多様な講座を開催する新生『ルネサンス大学』に改められた。住民の熱心な学習要求により応えていくためであり、一般教養、芸術、技術、ボランティア養成、スポーツなど十七の幅広い講座が用意されている。この改革によって青壮年層の参加が随分多くなり、どの講座も申込者が殺到する有り様である。そして大学終了後は、自主的サークルとして継続発展している例もあるほどで、住民の学習が定着してきている。

今後の課題としては、この学習活動が、コミュニティー・カレッジ構想の目指すソーシャル・スキル（町づくりのための社会的技法）を体得していく学習の場として、有効に機能することであろう。

地質館は、平成四年八月に開館した。新設ほやほやのもので、後述の青山文庫とともに佐川町ご自慢の施設である。建設費は三億五千万円。

ルネサンス大学　特別講座

エントランスホールを入ると子供達に人気のある動く恐竜・チラノザウルスが唸り声をたてながら迎えてくれる。つづいて大地の幻想と地質学の誘いのジオファンタジックルーム、珍しいボリビア産のオルドビス紀三葉虫、腕足類などを展示する特別展示室、研究史コーナー、螺旋型の地質時代模型のある主展示室、立体映像室兼企画展示室などへと進む。ほかに屋外展示もある。

佐川盆地は地質のメッカと呼ばれるように、越知町の横倉山を含め、中世代から古世代にわたる化石の宝庫であり、今後の発展に期待がもたれる。

青山文庫は既に全国的に高い知名度をもつ施設である。だが昭和三十八年十月に県立に移管されてからは、利用者が特定される傾向にあった。それを今回の町立移管によって展示内容を一新し、極めて意欲的な運営がされるものになっている。これは松岡司氏の努力に負うところが大であるが、町民はもとよりひろく小・中学生にも親しまれて、地域教育に不可欠のものになっている。また展示において「人権」を重視するなどこれからの博物館のあり方に示唆を与えるものとなっている。

このほか総合文化センターや山崎記念天文台もあり、いま佐川町はなかなかに文化的魅力に富む町になっている。

文学散歩 ⑤

明星来影の岬

岡林　清水

空海は、宝亀五年（七七四）、今の善通寺市街の西部、四国第七十五番札所の五岳山善通寺境内に当たる館に生まれた。幼名を真魚（まいお・まお）という。

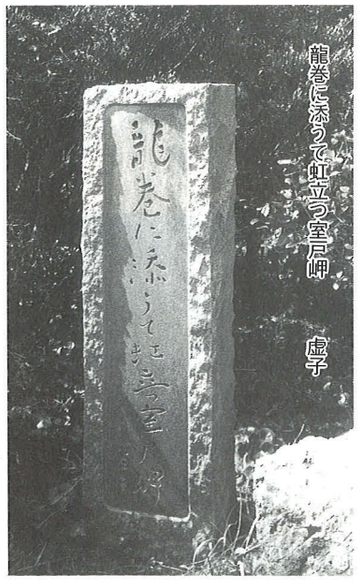
そのころは、近くの屏風浦に、館の後ろの五岳が影を落とし、その美しい景観を朝に夕に眺めることができたのだが、真魚が上京して学んだ長岡京・平城京は共に海の見えない都であった。しかも当時、平城京は廃都になろうとしていた。みかどは桓武である。山城の長岡の地に新都造営中であったが、何か心のおちつかない、緑に乏しい新都であった。

廃れゆく古都の退廃と、海の見えない閉塞の環境のなかで、真魚は性を思い、人生に悩み、ついに大学を離れ修行の道を選んだ。十九歳の時、海の国・山の国の南四国に渡り、まず阿波の大瀧の嶽（阿南市の西方、加茂町龍山）で修行の後、太平洋に突出する室戸の崎へ、真魚は遍照金剛のおもいを馳せて、ひたすらに進んで行った。

大瀧の嶽を下った真魚は、橘湾に沿う集落の辺りに出てきたかと思うが、これより星越峠を越すと、由岐の浦に出る。次は日和佐・牟岐である。宍喰を経て、いよいよ土佐の甲浦に入るのだが、これからが、さらに大変な道だった。まさに酷道であった。今は、室戸阿南海岸国定公園（昭和三十九年六月指定）といわれ、〝エンヴィ・リゾート（人も羨む休養地）まぜの海〟などと喧伝されたりしているところだが、このころの海岸は、ほとんど断崖か岩礁で、激浪が打ち寄せていた。容易に人の通える道ではなかった。

人力の限りを尽くして、地の果てともいうべき室戸の鼻（端）へ出たことは、これだけでも真魚にとって、遍照金剛（煩悩を打ち砕き、悟る）の世界に入る、大きな自己変革だったのだが、この岬で勤念を続けることによって、明星の体内に入る霊感を覚えるに至ったのである。

真魚二十四歳の時完成したといわれる思想文学『三教指帰』によれば、「土州室戸の崎に勤念す。谷響を惜まず、明星来影す」とあり、『御遺告』には、「土佐の室生門崎ニ寂留ス。心ニ観ズルニ、明星口ニ入リ、虚空蔵光明照シ来ツテ、菩薩ノ威ヲ顕ス」とある。鎌倉時代末期の作と伝えられる『高野大師行状図画』第一によると、「……口中ノ明星ヲ海ニ向ツテハキ出シ給フニ。其光リ海ニシヅンデ。イマニ至ルマデ猶金色ノ光リヲ残セリ」と書き記している。


龍巻に添うて虹立つ室戸岬　虚子

現在、室戸岬（室戸崎）には、佐伯真魚（空海・弘法大師）が修行したという神明窟・御厨人窟（『三教指帰』による。いま御蔵洞と書き、みくろど・みくらど・みくらどうともいっている）の二つの岩窟が残っている。

時に洞穴の虚無に徹し、時に龍巻の鮮烈な光景を凝視しながら、真魚のつとめた岬の勤念は、土佐の地に深く広く根を下ろしていったことと思われる。

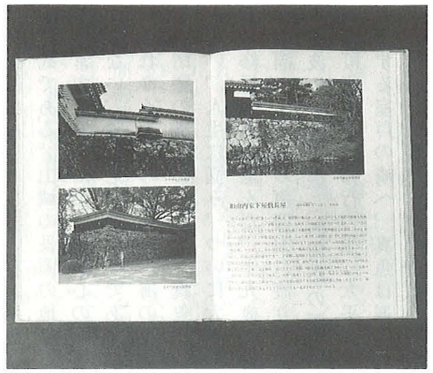
（高知大学名誉教授）

□高知の出版□

高知市教育委員会「高知市の文化財」

旅先で文化財を見学する場合には、事前に解説書へ目を通し、説明者の言葉に耳を傾けるのに、身近な文化財については却ってその労を惜しむ人が多いのは残念なことである。かくいう私自身、高知市の文化財は？と問われても、高知城・土佐神社・竹林寺等々を思い浮かべるぐらいで、即座に十指を折るのはむずかしい。ところが本書の序文によると、国・県・市が指定した文化財は実に九十八件にものぼるそうだ。本書は、それら指定文化財すべてと、それに準じる文化財や史跡・祭礼などをとりあげて詳細に解説し、それに写真・図版・所在地を示す地図などを添えたものである。

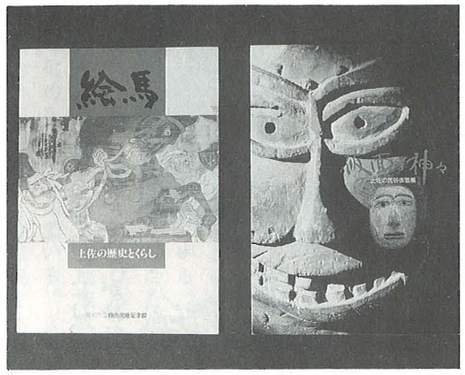
ひととおりめくってみて、まずカラー写真の鮮やかさが強く印象づけられた。印刷技術の進歩はいうまでもないが、撮影者の技量とカメラの背後にある視点のたしかさが感じとられたのである。劈頭を飾る土佐神社の航空写真によって、〝入とんぼ式〟といわれる社殿の配置と屋根の全体像を初めて見せてもらったし、十六葉にのぼる高知城の写真は、これまで漫然と見過ごしてきたこの城郭建築について新たな見どころを示唆するものであった。建造物や史跡の場合はまだしも、仏像や宝物などは訪れても見学できないことが多く、たとえ拝観を許されても光線や視角の制約から思うようには見えないものである。これからはこの良質の写真集を手許においていつでも鑑賞できるわけで、実に有難いことである。なかでも土佐神社所蔵の能面の全貌は今回初めて一般に披露されると聞くが、この分野での関心の高まりに応えると共に、文化財の記録と保護という点でも本書が一定の役割を果たすものと期待される次第である。



高知市教委は昭和五十四年に『高知市の文化財と旧跡』を刊行している。これはモノクロ写真による軽便なポケット版であった。今回出版の『高知市の文化財』は、前田和男・岡本健児・高木啓夫の三氏を編集委員とし、その他十二名の各分野の研究者を結集して作られたもので、内容・装丁ともに重厚な仕上がりである。最新の研究成果をもりこみ、専門家としての知見が随所にきらめいているが、他方では巻末に鑑賞の手引や年表を配するなど、一般読者への気くばりも忘れていない。編集担当職員の長期にわたる苦労をねぎらいたい。ただ一つ、目次に地域見出しがないため項目の検出にとまどうのが玉に瑕である。ともあれ、市民・県民の各家庭にもれなく備えるだけの価値ある一冊といえよう。

高知県立歴史民俗資料館「仮面の神々」
高知市立自由民権記念館「絵馬」

右の二冊は、今年の四・五月と八・九月に両館で開催された企画展の解説図録である。この種の図録は、主催者側にとっては活動の記録となり、利用者にとっては鑑賞の余韻を楽しみじっくりと見直すたねとなるものだが、この二冊の重みはそれにとどまるものではない。仮面と絵馬という未開拓の分野において、県下の遺品を総合的に把握した貴重な記録であり、すぐれた研究書にもなっている。特に三〇〇点をこえる土佐の民俗仮面について、形態・行事・伝説の三つの側面から考察を加えた梅野光興氏の解説は出色のものである。



（依光貫之）

第8回高知の映像コンテスト入賞作品

高知を撮る

船着場

近藤輝代彦

俗信健在

風俗歳時記

文明の進歩は科学の発達に負うところが大きい。それが多くの不可能を可能にし、人間に便利と幸福を与えてきたと考えられている。

そのひとつが大量生産の技術で、これによって人々は安価で品質のいいものをたやすく入手できるようになった。工業製品だけでなく、農業生産もそうなりつつある。医学や薬学の発達もまたそうで、ほんの少し前まで不治の病いとされていたものが、いまでは容易に治療できるものになった。今日ではもう呪術や祈禱は、治療としては不要になった。

だがすべての面で科学が受け入れられ、なにもかもそうした合理的な生活がされているかというと、そうではない。科学の力が殆ど無力に見える場合がある。

例えば人々の生活から迷信やら俗信が全部なくなったわけではない。

大安、仏滅などの日柄や縁起のよし悪しを気にする人は、いまも結構多い。頭では、そんなものは迷信で、科学的根拠などないとしながらも、友引きの日に葬式を出す人はいないし、結婚式となると、まずは大安の日が歓迎される。

干支でいう「ひのえうま」にしても、この年に生まれた女性は、勝気で夫をないがしろにする、故に縁遠くなるなどという俗信は、どう考えても納得のいくものでない。誰しも疑問に感ずることである。なのに昭和四十一年の「ひのえうま」の年の出生率は、ドラマティックといっていいほど減少した。これは六十年前の明治三十九年の「ひのえうま」のときよりはげしい減り方だった。

明治と戦後では、科学に対する信頼度が、隔世の感があるほど違うと思うのだが、人間のこうした部分は、なかなか簡単に改まらないらしい。いままたオカルトや心霊現象が騒がれるのもわかるような気がする。

（晋）

陶芸「生たまご」

和気あいあいと

梅原　乙乃

生たまごは、昭和六十年度に高知市青年センターで行われた第二回陶芸教室に参加した青年が、教室終了後も陶芸活動を続けていきたいという希望で結成されたサークルです。活動は現在、高知市青年センター二階の実験実習室で毎週木曜日（午後七時～九時頃）に行っています。以前は陶芸の先生も陶芸教室より残って下さいましたが、現在は会員数名、自分たちで好きなお茶碗、湯のみ、土鍋等を作っています。そして、年一回は筆山にある窯を借りて、素焼き、本焼きも行っています。和気あいあいとても楽しいサークル活動です。

そしてまた、このサークル生たまごは青年センター登録団体でもあり、いわゆる都市型青年団ヤングジェネレーション高知にも加入しています。毎年ヤングジェネレーション高知主催の青年センター祭がありますが、生たまごとしては、作品展示を行い作品を披露すると共に、サークル会員も募集しています。また、成人式の際には、青年センターで活動している青年たちが力をあわせて成人となる若者の為に行っている〝二十歳の広場〟への作品展示もあり、青年センターには陶芸サークル生たまごがあるんだという事をアピールして頑張っています。

連絡先　高知市桟橋通二丁目一－五〇
　　高知市青年センター内
電　話　〇八八八－三一－四九三一

「高知市民合唱団」

美しいハーモニーを求めて

大黒　英世

昭和四十七年十月、歌劇「沖縄」高知公演合唱団のメンバーを中心に高知市民合唱団が発足しました。翌年、高知県合唱祭へ参加し、その後、「第九」高知初演参加、四国合唱コンクール出場などを経験し、昭和五十二年四月、第一回定期演奏会を開催しました。以後、主に高知市文化祭共催行事として、今年まで十五回の定期演奏会を開催してきました。

メンバーは二十代～七十代にわたり、職業も会社員・自営業・漁業・医師・公務員・主婦等、様々。合唱を専門的に勉強している者はまれで、ほとんどが学生時代や社会人となってから合唱を始めており、中には全く合唱経験のない団員もいます。皆、歌うことが何よりも好きで、合唱でしか味わえないハーモニーを求めて練習場へ顔を出し続けています。

練習日は、毎週月曜日の夜七時から九時まで、南街公民館で行っていますが、定期演奏会（毎年七月）に向けて、一月からは毎週木曜日の夜も中央公民館で練習をします。

来年の演奏会は七月十三日（グリーンホール）に開催します。演奏会は一年間の練習の総決算で、ほどよい緊張感もあり、私たちの大きな励みでもあります。演奏会で少しでも合唱の楽しさを味わって頂けるよう、そして歌う仲間が増えるよう活動を続けていきたいと思います。

連絡先　高知市堺町九－二〇
電話　〇八八八－二二－一九五五

ＪＡ高知市婦人部「農の生花」

野菜や果物をアート感覚で

池田　篤子

農の生け花は〝土の大切さ〟を説きつづけた故横井直氏（農学博士）の遺志を夫人の友詩枝氏が広めたもので、私達の出会いは、ＪＡ高知市婦人部主催の文化教室でした。生け方として民具や農具など、身近にあるものを用い、野菜、穀物、木の実、果実などを使用し、大地からかもし出される新鮮さ、瑞々しさ、自然のもつ美しさを自由な発想と創造力また、美的感覚によってアイデアを生かし、日本の四季を楽しむことができます。

生活の拠点（ＪＡ高知市布師田支所）を中心に地区内のイベントはもとより、ＪＡ高知市のさまざまなイベント会場の舞台やロビーに生けさせていただいています。現在グループのメンバーは八名で、月一～二回ほど集まっています。新しい民具などが手に入るたびに話題が広がり楽しいひとときにもなります。

毎年行われている高知大丸での消費者生活展に参加してきたせいでしょうか、この頃では消費者の方々にも関心をもたれるようになりました。どこのご家庭にもある野菜や果物をアート感覚で楽しんでいただきたいものです。

私達は農の生け花へのご理解を深めていただくため、どのようなイベントにも参加させていただきますので、お手軽にご連絡下さい。

連絡先　高知市布師田三六〇四ノ一
電　話　〇八八八－六六－七五三九

「土佐民俗学会」

生活文化の理解を深め

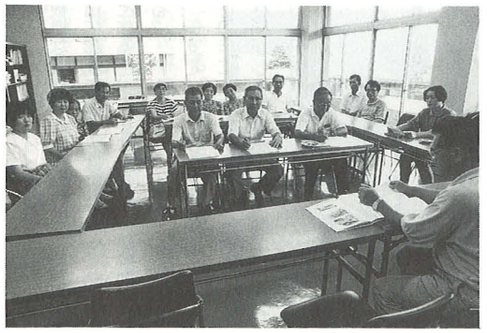
坂本　正夫

土佐民俗学会は昭和三十三年（一九五八）、十四名の会員によって発足しました。現在では県内だけでなく全国各地に約二百名の会員を擁する学会に発展しました。

土佐民俗学会の主な事業は会誌発行、共同調査、月例研究会（通称土佐民俗談話会）の三つです。

会誌『土佐民俗』は昭和三十六年の創刊で本年中には六〇号になり、学界でも注目される論文や報告も掲載されています。

土佐民俗学会では会員の親睦と、郷土や日本の生活文化についての理解を深めようという目的で、毎月談話会を開いております。どなたかに一時間くらいお話をしていただき、それを中心に雑談風に自由に話し合っております。



毎回の参加者は二〇名ぐらいですが、最近では会員外の出席者が増えております。

この会は原則として第三土曜日の十四時三十分～十六時三十分まで、高知市民図書館三階研究室で行っております。

なお土佐民俗学会はどなたでも入会できます。会費は年額二千円です。

連絡先　高知市本町五－一－三〇
　　高知市民図書館内
　　土佐民俗学会
電話　〇八八八－七五－九〇一八

JR土讃線が上本宮町――朝倉と鏡川を横切る南詰のたもと、大小二体のお地蔵さまが鏡川を臨むように仲良く建っている。ちょうど目の前にあるハネを守るために人柱となった千代と、その後を追った婚約者を祀っているのことだが、そのいわれを知ってか知らずか、大銀杏の下のベンチには若い二人連れをよく見かける。

風伯

アイの足りない街

大通りに面して動物病院がある。看板には動物病院の字の下に英語でアニマル・クリニックと表示されているが、病院ならクリニック（診療所）ではなく、ホスピタルとしなければ可笑しいなどと教養をひけらかす住民はこのあたりには一人もいない。

だが、この看板を仔細に見ればCLINICとなっていて、NとCとの間にIが足りない。しかし誰もそんなことに拘らないから、開設以来今日まで堂々と掲げられたままだ。

そこから少し離れた公園には桜の老樹が何本かあり夏場は蝉が喧しいほどだが、近所の猫達の中で狩猟の得意な奴が木に登っては自慢気に各々の家に持って帰る。

或日その桜の下に年輩の男性が虫捕網を持ち立っていた。蝉を欲しがる子供の居ない夫婦だけの世帯の人なので聞いてみると、その家の飼猫は不器用で木に登っては蝉に逃げられてばかりなので、代って捕ってやるのだと言う。なるほど少し離れた所にその家のミーコが期待を込めた顔で座っている。

もしも捕ってもらった蝉を喰って腹でもこわしたら、すぐその先の、Iの足りない動物病院に連れていってもらえるだろう。

高知市の旭地区は戦火に遭わなかった。車の入れない家並が多いが都市計画の実施は来世紀まで無いし、下水道はもちろん無い。そして何しろアイだって足りない街だ。それでもこの街の猫達は、夏は蝉時雨、冬は路傍の陽溜りの中で悠々と生きている。

（南北）

第9回

高知市都市美デザイン賞 推薦募集

平成5年1月29日 推薦締切

事業団では、街に個性と調和をもたらしている優れた建造物を広く知ってもらい、より美しいまちづくりを進めるよう「高知市都市美デザイン賞」を選出しています。

身のまわりで、街の美観や景観づくりに貢献している建物・モニュメントなどを推薦してください。

【対象】高知市内にあって平成4年1月1日から平成4年12月31日までに完工した建築物・建造物

〔推薦〕どなたでも推薦できます。はがきに次の事項を記入のうえ、推薦してください。一人で何件でも推薦できますが、はがき1通に1件とします。

① 建築物・建造物の名称・所在地・完成時期
② 推薦の理由
③ 推薦者の住所・氏名・年齢・職業・電話番号

〔送り先・問い合わせ先〕
高知市文化振興事業団「都市美デザイン賞」係

第9回　高知の映像コンテスト

写真展・高知を撮る 作品募集

平成5年1月29日 応募締切

〔テーマ〕高知を撮る
＊高知に関する写真であれば撮影対象は問いません。

〔応　募〕
＊どなたでも、一人何点でも応募できます。
＊ワイド四ツ切以上の作品で、発泡スチロールパネル貼りとします。
＊組写真は3枚までで、組写真であることを明記してください。
＊その他詳しい要項は事業団までお問い合わせください。

〔賞〕特選　2点（賞状と賞金5万円、副賞）
準特選　15点（賞状と賞金1万円、副賞）
入選　70点以内

〔作品展〕
平成5年3月中旬開催予定

〔応募先〕
＊㈶ 高知市文化振興事業団
＊高知県カメラ商組合加盟店または、フジカラープリント 取扱店

第3回 高知出版学術賞

推薦受付

「高知出版学術賞」は、当該年度における最も優れた学術出版を顕彰する賞です。該当図書についての推薦を受け付けています。

［対象］
①高知県内に在住する者の学術的著述、または他県在住者で高知県に関する事項をテーマにした学術的著述。
②一九九二年中（奥付の日付による）に発行された単行本。

［推薦］
自薦・他薦を問いません。必要事項を記入した所定の推薦書に、該当図書二部を添え、審査委員会まで提出して下さい。

［推薦受付期間］
一九九二年十二月十日～一九九三年一月三十一日

［表彰］
三点以内とし、それぞれの著者または編集に賞状と賞金十万円を贈ります。

＊推薦・お問い合わせは、文化振興事業団内、高知出版学術賞審査委員会までお願いします。

秋冬編（全四回）

土佐を味わう料理教室

講師　松崎　淳子氏（高知女子大学名誉教授）

〔日　程〕
11月7日(土)　秋鯖の季節
・鯖の棒ずし・あらの清汁ほか
11月14日(土)　海の幸　山の幸
・むかご飯・めじかの鶏もどきほか
11月17日(火)　遠洋漁業基地の味
・鮪のあらと大菜の煮食い・鮪の大わた料理ほか
11月24日(火)　正月料理
・黒豆・数の子・変わり田作・煮しめほか

〔内　容・献　立〕

〔時　間〕毎回午前九時三〇分～正午

〔参加費〕各回一、二〇〇円（材料費とテキスト代）

〔定　員〕三〇人

〔会　場〕潮江市民図書館実習室（高知市桟橋通一丁目電停東 ☎〇八八八－三二－四〇四四）

※申し込みは事業団まで

朗読公開講座　朗読を楽しむ

講師　久米　明氏（俳優・日本芸術学部研究所教授）

〔内　容〕指導希望者による課題作品の朗読
・五人～十人程度。参加申し込みの時に申し込んで下さい。
・テキストは芥川龍之介『トロッコ』。当日、事務局で用意します。
講師の指導
質疑応答
講師による模範朗読

〔日　時〕十一月一四日(土)
午後一時三〇分～四時三〇分

〔会　場〕木村会館三階ホール（定員一五〇名）（高知市旭町三－一二一 ☎〇八八－七二－〇三七四）

〔参加費〕一般一〇〇〇円、高校生以下五〇〇円

※申し込みは事業団まで

財団法人 高知市文化振興事業団　〒780 高知市本町5丁目2番3号　TEL(0888)73－4365　郵便振替 徳島 8-14869